

# 「学び」から見た直接体験の史的研究

## —日本近代史における見物の意味するもの—

学習指導係長 森 本 理

Morimoto makoto

### 要 旨

具体的事物に対する興味や関心は、日本文化の一つの伝統的特性で、興味や関心の対象は、その具体性にあった。自らの感覚によって直接に体験できる実在の世界を、人々は信じていたようである。「学び」の世界における直接体験主義の史的過程をたどることにより、これからの授業の在り方を考察する。

キーワード： 学び、絵解き、往来物、博覧会、見物、直接体験、抽象概念

#### 1 はじめに

明治20年、東京の上野で開催された世界博覧会で、日本教育史上極めて興味あることがあった。その博覧会に、日本最初の修学旅行が実施されたのである。旧制栃木県立宇都宮中学校である。この旧制中学は、博覧会见物を修学旅行と命名し、その旅行をカリキュラムの中に設定したのである。実物に接触することを教育という観念の中に取り入れたのは、近代教育史上、他に類例をみない卓見であった。ここに、日本人の直接体験主義を見ることができる。この直接体験主義、換言すれば、具体的事物主義こそが我が国の文化的特性の一つと捉えることができる。

#### 2 研究目的

抽象概念をあやつることは、学者の研究世界では普通に行われ、その結果として、優れた思想が構築されてきた。しかし、民衆レベルで考えてみると、興味の対象はその具体性にあった。この我が国の実感できる具体を重視するという文化的特性から、近代教育史における直接体験主義の意味するものを考察し、これからの授業の在り方の方途を探る。

#### 3 研究方法

- (1) 日本近世教育における往来物の「絵解き」文化史的意味と特性に関する事例的研究
- (2) 明治期における「網羅性」と「機能論」に関する事例的研究
- (3) 日本教育史における「見物」に関する分析的研究

#### 4 研究内容

- (1) 江戸期及び明治期の教育から見えてくるもの

日本の近世教育史の中で注目すべきものの一つに、いわゆる「往来物」がある。この伝統文化は、明治になっても絶えることがなかった。絶えるどころか、新たな時代の、新たな文物を目の前にして、多くの啓蒙家たちが、新たな時代の往来物を制作した。例えば、明治4年刊の『世界

商売往来』がある。著者は橋爪貫一という人物で、その序文には、次のように書かれている。

「洋舶交易以来、世間通行之書簡文章、頗雑漢訳西訳。童豪兒女子、往々有難読者焉。奈為是著小冊子名日世界商売往来……」

つまり、西洋との交渉が始まり、外来語が増えて、分かりにくいからこの小冊子をつくるという意味である。江戸期の往来物と同じように、この本でも、あらゆるものの名前が取り上げられ、七五調で編集されているのが面白い。この『世界商売往来』の特色は、「絵入り」にある。つまり、説明文だけではなく、図解を重視している点である。例えば、「ピン」という部分には、文字と文字との間にピンの絵が挿入されている。著者によれば「其図、其形、読者一目瞭然」とある。これは、学制（明治5年）以前の刊行なので、学制成立以前の初等教育では、これを教科書として使用したところもあった。橋爪貫一は、更に翌明治5年には、引き続き『続世界商売往来』を刊行した。続篇の漢文で書かれた序文を現代語にすると、次のようである。

「ある人がいうには、世間の文筆家には三種類ある。その第一は、高明正大の説をとねえ、民衆を啓蒙する人たちであり、これが上等の文筆家である。それを模倣するものの、充分な力量のない者、これが中等である。それに対して、こまごまとしたことを取り上げ、巷のことを相手にする文筆家、これが下等である。かくいう橋爪などは下等の文筆家である。」

重要な点は、この絵入り新語辞典が「明治初期の隠れたベスト・セラーであった」という事実である。仮に、福沢諭吉の『学問のすすめ』が「上等の文筆家」による高明正大な著書であったなら、『世界商売往来』は大衆的啓蒙書であったと考えてよい。そして、この書物の成功の最大の理由の一つは、絵解きにあった。西洋からの文明開化の品物、例えば、「短衣」ということばを紹介されても、それがどんなものであるのかは分からない。だからこそ「絵解き」という方法が重要な意味をもつ。その挿絵は見事で、「短衣」ということばのすぐ下にチョッキの絵が付けられており、著者のいうように「一目瞭然」である。

## (2) 「絵解き」の文化史的意味

日本文化の中での絵解きの伝統は古い。平安末期の遊行女婦が、絵巻物を持ち歩き、街頭でそれを広げて、雉の羽根で指しながら、その絵巻に描かれている地獄極楽の物語を語ったという。ことばが絵を伴うことができるための基本的な条件とは何か。それは、次のように考えられる。

ことばが絵を伴うことができる基本的条件 ⇒ ことばが具体的な指示物と対応していること

例えば「指輪」ということばがある。そのことばに対応して、金属性の指輪という実在を私たちは示すことができる。しかし、全てのことばが具体的な事物を示しているかというと、決してそうではない。人間には抽象能力があり、抽象語をあやつる。例えば、「自由」とか「正義」ということばがある。これらのことばは一切の指示的な意味をもたない。『世界商売往来』に著されたことばは、実在の世界と対応し指示的意味をもっている。著者がそういう指示的意味の明確なことばだけを集めようと努力したのか、結果としてたまたまそういうものになったのか、それは分からないが、この本に収められたことばは、それに対応する指示物をもっていた。だから絵解き

が可能となった。『世界商売往来』は、「商売」がその主題である以上、「契約」や「信用」という抽象名詞が登場してもよさそうだが、そうした抽象概念は見当らない。『続世界商売往来』で、著者は「各々取扱ふ品物の名義に於ては、能々是を智得せざれば、損あつて益なし」といつている。つまり、著者にとって重要であったのは、具体的な「品物の名義」であった。全ての抽象を避け、実在の世界でのみ考えようとしたのが『世界商売往来』の基本的なスタンスであった。つまり、我が国の近代化というのは、「抽象」ではなく「具体」から始まったと考えられる。

### (3) 具体的事物の文化史的特性

抽象概念をあやつることは、学者の世界では普通に行われ、その結果として、優れたな思想を構築してきた。しかし、民衆レベルでは、興味の対象はその具体性にあった。自分の感覚によって直接に体験しうる世界を民衆は信じていたようである。実感できる具体を重視してきたのである。例えば、落語という芸能の面白さは、抽象と具体の隙間に生まれる意味論的な断絶によって醸し出されている。ご隠居と八・熊の対話で構成される落語の例で考えてみたい。

ご隠居は、八・熊にむかって、「孝行」という抽象概念を語りかける。だが、八・熊は「孝行」が分からない。その挙句に「孝行」の実物を見せてくれという。ご隠居は、「孝行」のいくつかの話語る。しかし、抽象を具体化することは至難である。当然、ご隠居と八・熊との間にズレが生じる。この「抽象と具体のズレ」こそが落語的世界である。つまり、いくら具体を総動員しても、八・熊は「抽象」を理解できない。

逆な見方をすれば、次のように整理できる。

抽象概念は、指示的意味が明らかにされない限り、それは理解されることがない。つまり、一般的にいて、日本文化の中での意味の構造は、指示的意味に偏りをみせている。

江戸期における石田梅岩の心学は、比喩や例示によって具体を展開した。梅岩は、例えば「心」という観念を天侯にたとえ、その様々な状態や変化を語ったという。天侯という直接体験的な世界に比喩が当てはめられていけば「なるほど」と納得する。梅岩のこうした比喩能力は、その後の心学者たちにも受け継がれ、展開をみせた。

### (4) 明治という時代の原動力

我が国における博物学の歴史的研究の成果の一つに、上野益三『日本博物学史』がある。それを見ると、多くの博物学的な努力が江戸期以降に展開されてきたことが分かる。本草学をその基礎にした博物学の根幹ともいべき分類学の展開も興味あるが、分類学以上に、日本人は羅列的に事物を収集し、そのリストを作ることに熱中してきたかのように見える。『嬉遊笑覧』などは、そうしたデータバンクの一例である。『嬉遊笑覧』は、日常生活の中で体験的に知ることのできる事物を網羅することに力点が置かれている。このことから、日本文化史の特徴は、下のよう整理できる。この伝統が「往来物」の背景

となり、例えば、元禄7年刊の『商売往来』を見ると、「菊、笹、御所車、菱、柏、藤…」

「網羅性が体系性に優越している」ということ

ことばが配列されている。「菊、笹」と植物名が並んで、次にどうして「御所車」が出てくるのか分からない。そのあとにでてくる「菱」「柏」「藤」は、また植物名であるだけに「御所車」は違

和感がある。分類学からいうと理解できない。そもそも「分類」という思想が欠落しているとも言える。だが、ランダムに多くのことばを挙げていけば役に立つだろうと著者も読者も考えたのだろう。『世界商売往来』もその延長上にある。これまでに見てきた百科全書的な書物は、その原理をその実用主義的側面に置いているように見える。例えば、科学的分類でいえば、釘や針は金属として系統論的に分類される。しかし、日本の博物学は、「衣食住」という生活の局面を分類し、これらを一括して「住」の項目にまとめる。つまり、次のように整理できる。

系統論を無視し、機能論で分類することである。つまり、実用主義的なアプローチを重視するのである。明治期は、実用主義が強く発揮された時代である。

万延元年の遣米使節団の武士の日記を見ても、彼らが興味を示したのは、例えば、汽車であり、自動車であり、洋式水洗トイレであり、生活に密着した事物である。本来、この使節団の使命は、日米間の外交関係をつくることであり、それならば、アメリカ合衆国の憲法がどのような条文によって構成されているのか、また、それがどう運用されているのか、といった問題について調査するなど、その視点からの記録があつてしかるべきであるのに、そうした記録は皆無に近い。使節団は、直接体験と事物との接触の中で西洋を感じ、文明を知ったといえる。

「明治」に改元されたのは明治元年の9月だった。新政府をどのようにつくっていくのか、その方針や方法もまだはっきりしていなかった。しかし、この年の10月には、開成所ではミシンを使った仕立物の講習会が始まり、品川と横浜の間には蒸気船の定期便が運航を開始している。下岡蓬杖が写真館を開業したのもこの年だったし、ラムネとビールの製造も始まっている。

翌明治2年、まだ首都は東京ではなく京都にある。明治天皇が東京に遷都したのは10月である。藩は依然として機能していたし、そもそも榎本武揚ら幕軍が箱館に立てこもり、官軍と戦っていた。版籍奉還が正式に行われたのは、この年の6月である。しかし、横浜を中心とした地域では、西洋将棋、つまりチェスが流行している。白木屋がパンを製造し始めたのもこの年だし、汽船事業のほうは、航路を大幅に広げ、東京、横浜、大阪、神戸を結ぶ運航を開始していた。更に、12月には、東京－横浜間の電信も開通した。この歴史のチグハグな進行は興味深い。政治が流動的で、その姿を現していないにもかかわらず、西洋の事物を輸入したり、国産化をはかったり、新しい物質文化を導入する。明治期のそのような状況は、次のように整理できる。

「新政府が成立し、制度や法律ができ、その後、西洋の物質文化が日本に入ってきた」のではなく、「個別的な物質文化が次々に入ってきて、それを政治や思想、制度があとから追いかける」というのが明治という時代だった。

実際、明治の初期の10年間、政治は動揺を続けていた。一揆は発生するし、西南の役という内戦も起きている。政府高官の暗殺事件もある。ところが、それとは対照的に、事物のレベルでの近代化は確実に進行していた。新しいものは、次々と迎え入れられた。

精神文化の領域では、不明な点が多いが、物質文化は明らかに進歩していた。政治や思想は、手で触れたり、目で確かめることのできるものではない。しかし、洋服だの、瓦斯燈だのといったものは、体験世界の中でその実在感を味わうことができる。その可視的な世界の変貌が、人々に新たな時代を実感させた。実在の世界に直接に触れる、そういう認識の方法を日本人が好んだ

のである。このことが日本のいわゆる「近代化」の原動力や推進力であったといえる。

この認識方法に見合ったものとして、博覧会をはじめ、実物を体験的に見るための機会が次々と用意された。明治9年に、アメリカで開催された建国百年記念の博覧会に日本が参加した。参加したといっても、絹織物や手工芸品が少し出品された程度のものであったらしい。この博覧会は、今日、日本の各都市で開かれる万国博や見本市のような華やかさはなく、極めて即物的な特産品展示というにすぎない。だが、それは、物を通じて世界を認識する、という新たなメディアであったに違いない。アメリカ人も日本人と同じように極めて実用的な考え方であり、博覧会というかたちで新時代というものに興味をもったのだろう。つまり、次のように整理できる。

「博覧会という即物的な方法に日本人が即座に興味をもつことができた」ということ

明治以前にも「見世物」があった。「見世物」は、そうした「見物産業」の原型で、演出を工夫すれば、人々は感心して入場料を払った。「見る」ことへの興味、そして、「見せる」ことを主眼とした「見物産業」の成立は、現在でも、博物館だけの展覧会といったかたちで健在である。「博覧会」ということばは、「斬髪」「馬車」「岡蒸気」「牛鍋」といったことばと並んで、文明開化を象徴する新しいことばの一つになった。そして、これらの一連の内外の動きから、明治政府は、国の事業としての博覧会を開催しようとして決意する。

明治10年8月、上野公園で開催された第一回内国博覧会がそれである。この博覧会では銅器、陶器、反物などの物産の展示即売が行われると同時に、四ッ谷の勸業局製糸場から女生徒30人が会場の一角で新しい機械を使った製糸の実演を見せたりした。要するに、この勸業博覧会は、東京上野の都市開発計画もかねた、国家的大プロジェクトであった。世界博覧会を「見物」することは、「文明開化時代」の社会的・文化的通過儀礼と考えられ、多くの見物人がやってきたという。博覧会場で実演を見たり、製品を買ったりして、実物による直接体験を行ったのである。

#### (5) 日本における直接体験主義

日本文化における「見物」の直接体験主義は、旅行文化にも見ることができる。「見物」趣味は、鉄道の整備とともに爆発する。柳田国男はそうした明治の旅行文化を「遊覧本位」と定義し、否定的な視点で論じた。しかし、実物を直接体験によって確かめるという实用主義は、積極的に評価されてよいと考える。この实用主義は、ただ「見物」そのもので完結するものではないからである。「見物」して感心して帰る、そして、その「見物」によって何か新しい発想を得て、思考を展開させていくこともある。実際、日本の旅行文化の伝統の中には、「見物」の経験知を契機にして、そこから新しい創造をつくりあげるといふ文化がある。例えば、次のようなことである。

西行や芭蕉を引き合いに出すまでもなく、日本の旅行者は、直接体験に触発されて、自らの心境を語ったり、新たな解釈を試みる。体験世界を重視するということは、その体験が精神活動の新たな展開につながることを意味する。そして、かつての旅行者が、詩歌の創作という文芸の世界にそれを展開させたのに対して、明治の博覧会の見物人は、その展示品から科学技術における発明の刺激を受けたのである。「発明」という新しい文化の領域が構築されたのである。例えば、機関車からヒントを得て、蒸気機関によって自由に山野を移動するという、ジープのごときものを発明した人もいたが、和泉屋要助のような成功者もいた。彼は、馬車を見て、人や動物の力を使った伝統的輸送手段としてのカゴや牛車などをイメージしたに違いない。そして、世界的な発明となった「人力車」を試作したのである。日本技術史に燦然と輝く人力車は、明治初年から製

造され、文明開化の一つの象徴となった。そして数年のうちに、日本全国に普及したのみならず、中国や東南アジア方面への輸出品目となる。今日でも英語で「リキシャ」と呼ばれている。

大学などでの科学技術への探究が、庶民感覚と断絶していたのだとすれば、「近代化」は完全に底抜けのものになっていたに違いない。つまり、日本人は、その徹底的な体験と好奇心を動員して、分析的に理解し、応用したのである。これを「模倣」ということばで呼ぶ人もいる。しかし、重要なことは、このような飽くことのない体験と好奇心によって、西洋の事物を「模倣する能力」をもっていたのが、日本人において他に見当たらないというのも歴史的事実である。

## 5 研究結果と今後の課題

直接体験主義を歴史的に見た場合、その基本原理は、概ね次の3点にまとめられる。

- ① 我々を取り巻く環境は、仮説の設定と検証という実験をとおした操作的活動によって、知りたいことを明らかにしてくれる。逆にいうと、人間の主体的な探究活動がなければ、何も示してくれないということでもある。
- ② 我々を取り巻く環境は、主体的な探究活動（操作活動）に応じて、何をどのような方法で操作したらよいかを示してくれる。つまり、何を探究するのかという「問い」が明確になれば、「問い」自体が方法を指し示してくれる。このような探究の過程によって得られた結果が「知識」である。この知識は、「経験」「体験」とも呼ぶことができる。
- ③ 一つの経験は、また新たな「問い」を掘り起こし、新たな探究へと向かわせる。「経験の連続の原理」と呼ばれるものである。

この3点を、授業場面に当てはめて端的に述べると、「常に好奇心をもって生活し、問いを発見し、探究することが新たな問いや探究を生む。こうした授業が、知識を増やし、生活を豊かにする」ということになる。大切なことは、このことを単に授業の方法論として捉えるのではなく、教員自身の態度として捉えることにある。つまり、「こういう問いを子どもにぶついたら、子どもは、こういう探究活動をするだろう。また、こういう資料を要求するだろう。」と予想してみる。その予想に基づいて、自分でも活動し、資料を集めてみる。探究は、具体的で妥協を許さない。したがって、どの子どもにも納得させることができるように、細部まで調べ、資料を用意する。一つのことを探究していると、また、次々と疑問がわいてくる。それは、子どもがもつであろう問いでもある。その結果、知識は大きな深まりと広がりを持ち始める。

子どもは、教員の言うとおりに成長するというよりも、むしろ教員のするとおりに成長するともいえる。探究するという日々の身体としての教員の姿勢が、技術論、方法論を超えて、大きな意味をもつことになるかもしれない。

### 参考・引用文献

- |     |      |                      |         |     |
|-----|------|----------------------|---------|-----|
| (1) | 江森一郎 | 「勉強」時代の幕開け           | 平凡社     | 平2  |
| (2) | 春山作樹 | 江戸時代の教育              | 国土社     | 昭54 |
| (3) | 辻本雅史 | 近世教育思想史の研究           | 思文閣出版   | 平2  |
| (4) | 加藤有次 | 博物館学講座 1             | 雄山閣     | 昭54 |
| (5) | 森本 理 | 歴史学習における「手に取る教材」の衝撃性 | 奈良県歴史学会 | 平9  |